

# 「純粹小説論」から『家族會議』へ

——昭和十年の横光利一——

渋谷 香織

## はじめに

大正末期から昭和初期にかけてはわが国にマスコミ文化が成立した時期といえる。そして、このころから従来主流であった新聞・出版などの活字メディアが受け手である読者が大量化するという形で大衆化していった。

横光利一はこのような時期にマスコミに受け入れられ流行作家たる地位を築いていった作家である。彼の『家族會議』は昭和十年八月九日から同年十二月三十一日まで『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に連載された小説であるが、この小説が連載される十日ほど前に掲載された以下の予告の一部からも彼がマスコミに優遇されていた作家であったことを窺うことが出来るだろう。

現在わが国の小説界はその様式に、内容に、混沌たる状態を呈していますが、新鮮なる構想と独創的な手法によって小説の新時代を開くものありとすれば、横光氏こそ、まさにその第一人者でありませう、氏の創作力は今やその絶頂に達し、最高度の緊張を示しています、芸術の女神ミューズは妙想の翼を張って氏の周囲を乱舞しているかのやうです、かつて本紙に傑作『寢園』を発表せる氏は、今回「家族會議」と題する長篇によって再登場せんとするのであります。東京・大阪の二大都市を舞台とし、近代生活の回転軸をなす実業界を中心に今日の社会相を捕へて新聞小説にエポックを作らんとする意気込みですから、作者の熱意に満ちた洞察と描写の機械美とは必ずや三百万読者の絶賛を博するでありませう。

〔朝刊小説予告〕昭和10・7・28 東京日日

この点について、菅野昭正は以下のように指摘している。

横光利一は、いまや最大限に優遇される小説家である。書くことがどんなにふんだんにあっても、発表の機会から遠ざけられていたのは、誰だろうと活潑な生産者にはなれない。『寝園』からはじまる長篇小説の季節の継続には、長篇小説の生産者としての横光利一の「意欲」とは別に、ジャーナリズムのメカニズムが働いていたことも、やはり見逃してはならないのである。『横山利一』<sup>(1)</sup>

また、『家族會議』が連載された昭和十年という年は横光にとって意味のある年であったと言える。

この引用のように昭和五年の『寝園』発表以来、小説の発表の場の多い横光利一であったが、この年は一月に制定された芥川賞の選考委員に選ばれたり、明治大学文芸学科の講師になるなど、小説家として華々しい年であったのだ。

その中でも特筆すべきことは四月に「純粹小説論」を発表して文壇にセンセーションを巻き起こしたことである。本稿では横光利一が昭和十年に発表した新聞小説『家族會議』について「純粹小説論」との関わりも踏まえた上で論じていく。

## 一 「純粹小説論」

「純粹小説論」は横光利一がそのなかで「自分の試みた作品、上海、

寝園、紋章、時計、花花、盛装、天使、これらの長篇制作に関するノート」と言っているように、長篇小説制作を理論化する試みであった。すなわち、これらの作品が通俗小説であるという批判に対する横光の答が「純粹小説論」であったといえる。

しかし、この理論を組み立てようとする横光の意図は読みとれるものの、用語の不適切さあるいは論理の整合性のなさから、前述したように小説家、批評家に大きな波紋をよんだ。川端康成の「『純粹小説論』の反響」<sup>(2)</sup>によると発表の翌月の雑誌には十九編の賛否両論の意見が載せられたという。そして、この反響は同時代にとどまることがなかった。

横光は「純文學とは偶然を廢すること、今一つは、純文學とは通俗小説のやうに感傷性のないこと」と言ったうえで、ドフトエフスキーの『罪と罰』という小説をあげ、「通俗小説の二大要素である偶然性と感傷性とを多分に含」むため「通俗小説であるばかりではなく、純文學にして、しかも純粹小説である」と述べている。

これに対して小林秀雄は以下のような批判をする。

通俗小説家が多數の讀者を狙つて書くとは、讀者が常日頃抱いてゐる現實の小説的要約を担うといふことだ。だから成功した通俗小説に於いてはそこに描かれた偶然性とか感傷性とかいふものには、必ず讀者の常識に對して無禮をはたらかない程度の手加減が加へられてゐる。讀者は自分に納得のいかない偶然や感傷に決して我慢してはゐない。處が現實世界は誰にも納得のいかない偶然や感傷に充ち充ちてゐる。

る。さういふ世界に眼を向けては通俗作家は爲すところを知らない筈である。だからさういふ世界が常にリアリズムの土臺であつたドストエフスキイの様な作家の作品に現れた偶然や感傷は、通俗小説中の偶然や感傷とは縁もゆかりもないのである。

(私小説論)<sup>(3)</sup>

指摘されたような整合性のない理論が、はたして、この四ヵ月後から連載された『家族會議』に生かされているのだろうか、考えてゆきたい。

## 二 『家族會議』の構想

横光利一は後年『家族會議』について次のように述べている。

魯迅と逢つたとき、氏は自分は支那の政府に一萬圓ほど貸しがある、といふのは、北京の大學の教師をしてゐるとき、いつまでも月給をくれぬので、あるとき月給をくれと言つたところが、大學の教師のくせに月給をくれとは何事だと叱られたと言ふ。日本の文學者も一先づこのやうな目に会ふが、金銭を不潔とみる東洋精神でヨーロッパの知性を身につける苦しさは、作品をどのやうに變形させるかと氣附いた最初の一人が夏目漱石である。漱石は金を欲しくて書いた作品が、今から思ふと一番良いと言つたといふ。このやうな逆説も口にすれば今なお汚くなるのはやむを得ないが、日本文學も愈々金銭のことを書かねば近代小説とは言ひ難くなつて來た。

私は一昨年家族會議という茶番小説を書いてヨーロッパへ行くことが出來たが、これは東京商人が日分十錢で大阪商人から金を借りるのが鬭争の原因になる小説である。ところが金銭を絶えず運轉している商人の私の知人が、日歩十錢だとしても苦しくて商賣は成り立ちませぬよ。もう五錢以上は絶対に駄目ですと言つて、自分の身を斬られるやうに眼を見張つたことがあつた。しかし、文壇の人々で日歩十錢がいかに人身を驚倒させるべきものか感じてくれた人は一人もゐなかつた。そんなことは問題ではないといふなら、現今の日本の大衆の悲惨が、日歩四錢五厘から三錢に、どんなにして銀行をやりくりするべきかといふことにあると氣附かぬ人の云ふことだ。ヨーロッパの知性とは、金銭を見詰めてしまつた後の知性である。

(「覺書」昭和十二年十月)

日本の知識人特に小説家たちが金銭に関わることを潔しとせず、また金銭感覚そのものもなかったことを指摘し、「日本文學も愈々金銭のことを書かねば近代小説とは言ひ難くなつて來た」という横光利一の目のつけどころは正しい。そこに彼の時代の先驅者としての一面を窺うことが可能であると同時に、時代の先驅者たろうとする彼の創作意識をかいまみることができるのである。

横光利一が昭和三年から發表しはじめた『上海』という小説を昭和十年に「決定版」と称するまで二度改稿していることの意味づけを小稿で<sup>(4)</sup>

は「純粹小説論」の「その作中に現れたある一人物ばかりが、自分こそ物事を考えてゐると人々に思はず小説」から、「多くの人々がめいめい勝手に物事を考えてゐるといふ世間の事実」にのつとつた小説に変貌させようとした過程としたわけであるが、この『家族會議』という小説でも「世間の事実」を描き出す手段として、いままで小説家たちがその作品から排除していた金銭の問題を小説の中心にすえようとしたといえるのではないだろうか。

岩上順一の『横光利一』<sup>(5)</sup>によると『家族會議』の挿絵を描いている佐野繁次郎が横光利一の材料取材時の様子について次のように言つたという。

『家族會議』がはじまる前、横光氏も大阪にゐたので、僕と二人で、家をみたり、人に會つたりした。そんな人と横光氏が話してゐる時、僕も側できいてゐたのだが、僕は船場に育つた人間だから、これがこゝう、あれがあれ、とはつきり考へたこともなくて過してゐた事ごとを、はつきりしてもらつてゐるやうな氣がした。横光氏に話してゐる船場人も、僕の方を振りかへつて、同意を求めて「さうだ、さうなつてゐるんだね」と横光氏の質問によつて、自分の身の廻りを發見してゐる有様だつた。

株のことでもさうだつた。

僕はさうしていはゆる小説になる前を側でみてゐたが、五六十枚も手帖に控へておいて、使ふ時は、ほんの二三行といふ、あゝいふ小説

家の辛抱心には全く言葉もなくなる氣がする。

横光利一の新しい問題意識であつた「金銭」への取り組みの姿勢が積極的なものであり、熱心に取材されたものであることがわかる。このやうな「五六十枚も手帖に控へておいて、使ふ時は、ほんの二三行」といふ金銭問題へのあくなき追求の姿勢が『家族會議』という小説の背後にあるのである。

しかし、「金銭」のことを經濟問題、あるいは企業乗っ取り問題として捕らえていたかという点、必ずしもそういえない。

横光の意識の根底には、やはり彼が『機械』や『寢園』で捕らえていた何か見えないもの、絶對的なものが世界を動かすのだという考へが見えかくれしている。彼は金銭も人間関係を左右する物に過ぎないという考へを『家族會議』に至つても、ぬぐい去ることが出来なかつた。

經濟小説という側面を持つていても、それが『家族會議』のすべてとはいえない。

構想としての「金銭」は主題という側面を担うことはできなかったのである。

### 三 人間関係

二で述べたやうな観点から、この小説における人間関係について考えてみたい。

横光は初期の未定稿作品『悲しみの代價』から一貫して運命に、ある

見えないものに翻弄される人間像、あるいは人間関係を描きつづけている作家である。

主人公高之の結婚問題が解決すると言うストーリーが経済小説というカバーに覆われたこの小説の中心ではないだろうか。

### (一) 高之と泰子

人間関係のなかでも、この小説では結婚問題がその中心にあると考えられる。この点から高之と泰子について考えてみる。

重住高之は東京兜町の株の仲買店主であり、結婚相手を捜している存在である。

高之の結婚相手の候補者の一人仁禮泰子は大阪の北浜の仲買人の娘であるが、高之は泰子の父に株でやられたせいで自分の父が死んだと考えているため、彼女とは結婚しまいと思う。

それが「仁禮さんの娘なればこそ」と言う理由をつけ泰子と結婚しようと思うようになる。

しかし、仁禮家の番頭練太郎の「重住さんが、このごろ大阪へ、ちよくちよく、良うやつて來やはりますのやが、僕、あれは、例のあの計畫を嗅ぎつけに、來てはるらしい見受けますので、嬢さんに逢はるるのは、宜しけど、どうしたことか嗅ぎつけられんとも限りませんから、しばらく何とかありませんでつしやろうか、どうにも仕事がり憎うて、困りますから」という仁禮への進言により、泰子は監禁されてしまい、会うことすらままならなくなってしまう。まさにロミオとジュリエットの恋の物語の様相を呈するようになるのである。さらに、仁禮文七の兜町

を潰す計画の成功によって高之が破産することさらに引き裂かれるかのようにみえ、それに追い打ちをかけるように、高之の店の番頭の娘春子が文七を殺すという事件が起こる。

しかし、最後には大阪から訪ねてきた泰子が病気で倒れ彼女の世話をするうちに高之は結婚を決意することになるのである。

醫者は肺炎のおそれがあるから、注意するやうにと云つて、注射を二本して歸ると、すぐ頼んだ看護婦がやつて來た。

泰子は床へついてから、ずつと眠りつづけた。その間、高之はほとんど泰子に付ききりであつた。

彼はときどきうは言を云う泰子の聲の中に、自分の名を聞いた。

泰子の痩せ衰へた姿が玄關へ現れたとき、高之はすでに泰子の覺悟のほどを感じたが、今は彼も、泰子の不思議な無我夢中の力に、抵抗することは出来なかつた。

思へば、いろいろの道を通つて來たものと、高之は思つた。

彼は、實際、あらゆる自分の知識を利用して、富からも、愛情からも、義理人情からも、逃げ廻つて來たのだつた。

いつたい、何のために、逃げてゐたのであらうと、高之は泰子の寝顔を見ながら考へた。

つまり、俺は、仁禮文七といふ、英雄と闘はねば、肚の蟲が納まらなかつただけなのだ。

と、かう高之は思つた。

全く理由はそれだけだった。泰子も自分も、犠牲にせずにはゐられなかつた彼の意氣も、たうとう、泰子に倒れ込まれると同時に、彼からは消え失せてしまつたのである。

高之は、泰子の病氣が癒り次第、彼女と結婚しようと思つた。それから、第二には、一つ大手を振つて泰子の財産をひつ掴まうと決心した。

#### 『家族會議』

このように考えてみると、金錢あるいは見えない力で引き裂かれそうになつた二人が結ばれるというストーリーが浮かびあがる。

#### (二) 高之と忍

(一)では、高之と泰子の結婚という点に絞つてストーリーの展開をおつてみたわけであるが、この小説からはほかにもいくつかの人間関係の構図が読み取れる。

そのひとつが、高之と忍の関係である。ふたりは泰子を交えて裏千家の仲間という関係であり、忍は輕井沢で高之が泰子から逃げようとするときに会わせようと仕組んだり、泰子に高之のもとにいくように進めたり、いわば恋のキューピット的存在であるが、実は高之に好意を寄せているのである。表面的には明るく振舞おうとするものの、ふたりの結婚を知つて泣き崩れるしかない。

忍は、恋のキューピットという役割だけではない。高之にとって父親の池島と同様、生活を救つてくれた存在でもある。

忍の父の池島に株券を譲り受けたことで、最初の危機を乗り越えた高之は、文七の兇町壊滅に立ち向かうべく借金をする。

この攻防戦にはあえなく破れ破産するものの、忍が店の権利を買い取るという形で店は存続することになるのである。これには以下のような意味づけがされる。

全くこれは、忍と高之の冗談から、駒が出たのだつた。考へて見れば、忍にとつては、泰子への義理もあり、泰子をさし置いて、多額の金錢を、高之に貸したくとも、貸すわけにかなかつた。かつ又、高之にしても、忍の父に多くの迷惑をかけてゐる上に、若い婦人の忍から、何の抵當もなく、多額の金錢を借りる感情は起らなかつた。

云はば、どちらもの云ふに云はれぬ微妙な、奥ゆかしい禮儀が、自然と忍を上に乗る結果になつて來たのである。

#### 『家族會議』

#### (三) 高之と練太郎

この小説に大阪と東京の対立という様相を読みとるとしたら、その一つに高之と練太郎という二人の青年の対立があげられる。

練太郎は仁禮家の番頭であり、文七から泰子の婿にと考えられている。その恋のライバルが、泰子の慕う高之である。泰子は練太郎の好意にも冷たい。

「嬢さん、どうです。これは、宜しますやろ。竹屋ですよ。」

「いくら竹屋かて、床の間の壁に立てかけた傘なら、あたし嫌いやわ。」

泰子はさういつても、練太郎から受けとつた蛇の目の頭を、微笑しながら眺めてゐた。

「壁に立てると、あきまへんのか。」

「それや、壁は油を吸いとりますやないの。あ、これや、澁蛇の目やあれへんわ。」

「さうかて、これは二つ切りの上等でつせ。」

「二つ切りでも、澁蛇の目やないと、油が上手に上つてへんもん。」

「えげつないこといはんと、とつといてとくなはれ。」

#### 『家族會議』

このような泰子の練太郎への態度は最初から最後まで変わることなく、この泰子をめぐってふたりは殴り合いをする。「重住さん。あんた、泰子さんをどないしてくれますのや」といって、殴りかかる練太郎と高之の格闘を横光は以下のように解説する。

全く、この争ひは子供のやうになつたが、とにかく、二人の格闘は、何物が間に這入らうと、格闘したとなると、休止出来難い状態になつてきたことは確であつた。二人の怨恨はただ単に、泰子と株をめぐつての闘争ばかりではない。關東と關西の氣質の相違もあつた。そ

れに、格闘してゐるうちに、互の怨恨そのものについては、どちらも忘れてしまひ、不思議に日常時の青年を支配する、東大と京大との、意識の下で燃え合ふ闘争になつて来たことも見逃せない。なほその上、絶えず丁稚上りの蔑視を受けてきた練太郎の、上層の階級に対する反抗も、うんうん呻いてゐる聲のなかには、明らかに混じつてゐた。

#### 『家族會議』

このような二人の争いは引用したような泰子をめぐる問題だけではないが、高之が泰子と結婚しようと決意すると同時に、高之に思いを寄せていた東京の仲買人の娘梶原清子が練太郎と結ばれるという關係に落ちて終息する。すなわち、そこに大阪と東京の和が成り立つ構造を示すことになるのである。

以上、高之を中心とした人間關係について考察してきたわけである。この小説には經濟、金錢という見えないもので人間關係が翻弄される小説という、それ以前の横光の考えにつながっているものであるという読み方が可能であろう。しかし、この小説の關係性は『上海』における關係性が、常に状況と関わってできあがってきたのとは異なっている。五・三〇事件を中心とする歴史の流れに翻弄されてきた主人公達の姿はここではもはや見られない。(一)の引用部からもわかるように、高之は金錢という力に翻弄されながらもその力に立ち向かつて決断して行こうとする意志を持った人間として描かれているのである。

#### 四 絶対者としての仁禮像

『家族會議』のなかで、大きな位置を占めるもう一人の人物が大阪の株の仲買人仁禮文七である。自分が株主である大阪製紙の成績をあげるために、東京製紙の乗っ取りを企てる。また、さらには、東京取引所の株価が実状に合わず高値をつけていることに腹を立て、兜町を潰してしまおうとする存在である。そして、彼の存在は高之にとって以下のように思える。

あの人は、物質の権化みたいな人で、物質の動く法則のままに、従ふことを天職だと考へてる人なんだ。それが、あの人の道徳だ。個人の没落などに、氣を奪はれてちや、相場といふ文化の粹の頂上では、不道徳になるのだ。それは立派なことぢやないか。ところが、僕は、精神の法則に従う事を道徳だと思つてゐる東京人です。それなら、仁禮さんが、どんなことを仕様と怨みに思つちや、もう僕の負けなんだ。分りましたか。僕は仁禮さんが、物質の運動の法則に従つて活動すればするほど、感心しなきやならないんだ。それでなければ、東京人の恥さらしだ。僕の苦痛は、ここさ。負けて勝つと云ふのは、昔は大阪人の云ふ事だつたが、今は東京人のモットーなんだ。 (『家族會議』)

ここに、金銭を俗なるものとして扱う作者の意図が見えているといえる。また、このように仁禮を分析する高之の聡明さを際立たせようとし

ている。

#### 五 新聞小説『家族會議』

このように、小説の構想、人間関係等について考えてみると、この『家族會議』という小説の枠組みが浮き彫りになってくる。

金銭のことを描こうとした横光利一の試みは、やはり、この小説以前の絶対者がいる構図、目に見えない力に翻弄されている人々の姿という創作意識を超えることはなかったのである。「物質の権化」である仁禮を配しても、かれを絶対者、超えきれないものと設定してしまったことで、金銭の事は横光のなかでは、創作の中心になりえなかったためである。いくら金銭の事を描かなければならないと意識しても、それがすぐさま経済小説になりえるとは限らない。金銭のことも横光にとっては、人間が翻弄される状況設定に過ぎないのである。

しかし、ここに描かれた人物像は自意識からとき放たれた決断でできる存在として設定されている。金銭という物質に翻弄されながらも高之が泰子との愛を意識的に成就させる過程がこの小説の中心である。

また、『家族會議』を「純粹小説」の実践という側面から考えてみると、そこにはやはり少し無理があろう。それは「純文學」にして「通俗小説」というテーゼそのものの問題に加え、「純粹小説論」そのものが、それ以前の小説の意味づけという様相を呈しているにすぎない論文だからである。『家族會議』は、『寢園』からはじまる横光の恋愛長編小説の延長線上にある小説であり、「純文學」という規定は難しいのである。



このように、横光利一の『家族會議』という新聞小説について考えてみたわけである。しかし、この『家族會議』という小説を簡単に論じてしまうことはできない。それは、この小説は昭和十三年に発行された創元選書のものとは大きな異同があるためである。昭和十一年のヨーロッパ旅行が横光利一の作家活動を大きく変えたものであると考えると、旅行前の新聞小説『家族會議』がこのヨーロッパ体験を経てどのように変わって行ったのかつづさに検討する必要がある。確定した『家族會議』論については、次回にこの異同を踏まえた上で論じることにする。

注

- (1) 講説社 平成三年
- (2) 「文藝春秋」昭和十年六月號
- (3) 「經濟往來」昭和十年七月
- (4) 「上海の改稿をめぐって(一) 人物像の変遷」  
(東京女子大学日本文学) 昭和六十一年九月
- (5) 三笠書房 昭和十七年